

遊牧の花嫁

登場人物紹介

アーディル

騎馬民族ジャラフィード
一族出身の医師。
互いの利害の一致から、
リナと偽装結婚の
契約を交わす。

ジャミア

軍部の参謀総長。
異世界人の知識に
目をつけ、囲い込もうと
狙っている。

シグ先生

王宮医師。
温和で茶目っ気のある
おじいちゃん。

ラキーブ

集落の長で、
アーディルの伯父。
謹厳実直を
絵に描いたような人物。

ニーノ

王宮に勤める薬草研究者。
ひょうひょう
飄々とした態度の美青年。

ハニー

リナの愛ロバ。

リナ(橋田梨奈)

突然異世界トリップ
してしまった元OL。
女性の立場が弱い世界で
自分の身を守るため、
アーディルと偽装結婚して
薬師を目指す。
明るく前向きな性格。



第1章 荒野の夜

「よし。これで今日の分はできたかな」

獣脂を燃料とするランプが揺らめく絨毯の上。ごりごりと煎じていた最後の生薬を、慎重に薬包紙に包んでカゴに入れる。

薬包紙に使用される油紙はこの地では結構貴重。さらに、折り方だけで何の薬が入っているかを見分けるから、間違えないようにしないとね。

胃薬、吐き気止め、化膿止め――

充分すぎるくらい何度も確かめてからカゴを持って立ち上がり、年季の入った保管用薬箱に収めれば、これで本日の作業は無事終了だ。

長い時間背中を丸めてたから身体はバッキバキ。両腕を上げて縮こまった身体を一度伸ばす。

どのくらい作業してたんだろ……？

そう思って無意識に時計を探す自分に気がついて、またやっちゃったかと苦笑する。

生まれてこのかた、二十四年。

時計のない生活なんて今までしたことなかったから、どうしても馴染めないんだよね。

ここに電気が存在しないことはすんなり受け入れられたのに。不思議なもんだ。大振りな耳飾りを揺らして首筋を伸ばしながら、テレビもパソコンもない異国情緒たつぷりの部屋を改めてぐるりと見渡す。

この小さなワンルールの幕屋は、モンゴルの移動式住居・ゲルによく似ている。小さな新ストーブを中心に、木組みの円筒形の壁にはタペストリーが飾られ、天井には傘を載せたような緩やかな屋根が広がっている。

他の幕屋と少しだけ違うのは、ここがお医者様の家だから大きな薬草棚と薬箱が部屋のあちこちに置いてあることくらいかな。

草原の上にコロンとしたフォルムの幕屋が並ぶ姿は、なんとも言えず愛らしい。

世界は違えど、荒野と草原を駆け抜ける遊牧民族の発想は似るのかもしれないな。

そんなことを考えながら天を仰ぐと、屋根の中央にある窓から丸い月がちらりと見えた。

うわ。結構、時間かかっちゃった！

時計がなくても、時間経過は太陽や月の動きでわかる。生薬作りにはまだ慣れていないとはいえ、もう少し手早く作れるようにしないと、お手伝いをする意味がない。

そう焦りながらも、まさか普通のOLである私がマウスとキーボードの代わりに乳鉢や薬研と格闘する日が来るとは想像すらしなかったわけ。

人生何が起きるか分からないと、思わず溜息をつく私、橋田梨奈二十四歳、元OL。

現在、迷い込んだ異世界で、絶賛遊牧生活中です。

始まりは、二ヶ月前の梅雨の終わり。

都心の、あるオフィスビルで、セクハラ上司の後ろ頭を叩いたことが発端だった。

常日頃、肩もみだの手相だの理由をつけて触ろうとしてくるセクハラ親父には、充々分注意していたはずんだけどね。

ヤツは事もあろうに、給湯室でお茶を淹れていた私の背後に忍び寄ると、「あ〜。やつぱり橋田さん、生足じゃないんだあ」と、スカートのスリットに指を這わせながらのたまった。

振り向きざまに咄嗟に手を上げたのは、確かに私が悪い。

うん。そこは反省する。いかなる時でも暴力反対。ごめんなさい。

でもさ。キレイに入った手刀がそいつのカツラを吹き飛ばしたのは、私のせいじゃないよ？
ついでにソレが、通りがかりの営業部長の前に落ちたのも！

その結果、怒れる上司のパワハラがスタート。仕事は山積み、毎日残業。週末までお得意様の新工場お披露目会に強制同行だし、件の上司は社長の甥だから周りも手出しできないし！

で、極めつきはコレよ。

「これは一体、どういうことなんでしょうか！」

「だからね。君は社会人として色々反省すべきだと思うんだよね。僕には年若い君を指導する責任

がある」

はあああ!?

免許を持ってない私が郊外に行くのに、上司の運転する営業車に同乗するのは嫌だけど仕方ない。でも今道の先に見えるのは、山の上に燦然と輝く、お城の形をしたホテルだけ!

——あ。もうこれは労働基準監督署に訴えるとか、交番に駆け込むとか、そういうレベルだわ。このまま連れ込まれてなるものかと、赤信号で停まった車から隙を突いて飛び降りた。

雨が降る中、傘もささずに走って走って、追いかけられないよう山道に逃げ込む。どんだん強くなる雨と雷。

なのに大きな木の下で立ち止まるなんて、冷静なつもりでもやっぱりパニックッていたらしい。後ろに誰もいないのを確認してからスマホを出した、その瞬間。

全身を震わす、ドン! という衝撃とともに、ぐにやりと大地が歪んだ。

目を見開く私の前で、紫陽花の上で跳ねた雨粒がシャボン玉みたいにふわりと浮いて停止する。

何これ……

緑の木々の合間。宙に浮く幾千幾万もの雨粒が淡く虹色に輝き始め、やがて嬉しくてたまらないといったように一斉に空へと舞い上がり始める。

眩し……!

それが私の覚えている、日本での最後の記憶だ。

あの後、気がつくど荒野のど真ん中で倒れていた私は、わけも分からず、あちこちを彷徨った。最初は「随分とよくできた夢だな」と暢気に構えていた私も、ついに砂袋のように重くなった身体を岩山に預けるにあたって、これが現実だと受け入れざるを得なかった。いつか二人で中央アジアを旅したいねと姉と話していたのは、遭難したいという意味では断じてない。

偶然薬草採取にやって来た男性医師・アーデルに見つけてもらえていなかったらと思うと、今でも背筋が凍るよ。行き倒れの異世界人を拾う羽目になった上、そのまま保護してくれた彼には、本当々に感謝してもし切れません。

そんなわけで、こちらの世界に迷い込んで早二ヶ月。

今宵も私は家主に恩返しをすべく、微力ながらお手伝いしているわけです。

「空になっていた薬箱の小引き出しは全部薬を補充したし、使った器具も綺麗にしたでしょ。お願いされたヨモギもどきのスマルの葉は、半分は抽出してオイルに。もう半分は乾燥棚に広げて、茎は取るっと」

点検も兼ねてブツブツ言いながら手を動かし、誰もいない幕屋の入り口をちらりと見る。耳をそばだてても拾えるのは、少し強い風の音ばかり。

ん……。やっぱりいつもより遅い、よねえ。

ちよつと不審に思っ小首を傾げる。

大抵天窓から月が見える時間には帰って来てるのに。珍しいな。

今日は街に行くって言ってたから、そこで急患でも入ったのだろうか。そんなことを思いながら全ての仕事を終わらせていると——ようやくランプの炎が揺らめいて、夜の荒野の匂いが入ってきた。「おかえりなさい。遅かったね」

薬箱の最後の引き出しを閉めながら振り返る。すると、入り口の垂れ幕から入って来たのは、草木の束を肩に担いだ一人の精悍な青年、アーデルだった。

「あ。待つて待つて」

慌てて薬草を置くための敷き布を用意して、入り口付近にいくつも広げる。

ええと、根のものはこの敷き布で、枝ものはこっちの固い絨毯でしょ。傷みややすい薬草には、種類によって活けるための水桶と、綿花を入れた木桶をいくつか用意して……

あとは何かあったかな？

そうしてわたわたと準備を終えると、それを静かに待つていたアーデルは、重さを感じさせない動作でどさりと荷物を置いた。

「遅くなった。悪いな」

「ううん。大丈夫。でも今日は随分大量に採ってきたんだね」

目の前に積まれた薬草はいつもの三倍以上あるかという量と重さ。私だったら両手で持ち上げるだけで精一杯だろう。

それを片腕で担いでしまうんだから、お医者さまとはいえずすが、生粋の遊牧民。スラリとして

いるのに、相変わらずの鋼の身体だ。

大量の仕分けをしながらその重さに四苦八苦していると、背後から琥珀色の長い腕がスツと伸びて、私の手から重い枝を取り上げ、黙々と仕分けを手伝ってくれる。

でも、これだけあればしばらくすることに困らないけど、薬草を取りすぎて困るのは医者本人だと、アーデルは言っていなかったっけ？

少し不思議に思っていると、それに気づいた彼が、「今回はこの分量が良い。しばらく天候が荒れそうだからな」と、簡潔に答えをくれる。

「そっか、納得。じゃあここ数日は部屋での調合メインだね」

「ああ」

この薬草の分量からしても、調合だけで三日程度はかかりそうだ。

彼はどちらかと言うと寡黙な方だけど、こうやって私の疑問の一つひとつに答えてくれる。それはこちらの生活に慣れていない私にとってありがたいし、何より単純に嬉しかった。

「今、夜食を出すから待つて。今日は随分と遅かったけれど何かあったの？」

立ち上がった、既に支度してあった鍋をカマドの上に移す。

すると、ちよつと苦い顔をして何かを言いよどんでいる様子のアーデルが目に入った。

——珍しいこともあるもんだ。

また強引な見合い話でも持ち込まれたのかな……

刻んでおいた香草を鍋に入れつつ、そう思う。

表情の変化の乏しい彼が、一番感情を見せるのがこの手の話だと、短い付き合いながら知っている。『結婚』という言葉を書くことすら辟易としているアーデルは、弱冠十八歳にして王都で研鑽を積んでいるという超エリート医師。

その上、端正な外見から滲み出る凄味のある色気と、それを一瞬で抑え込んでしまえる程ストイックな魂が一つの身体に同居している、つまりは周りが放っておくワケがない優良物件なわけで。——でもその結果が女嫌いつていうんだから、どこの世界でもイケメンは大変だ。

そう思いながらもカマドと格闘を始めれば、意識は自然そちらに向かう。

以前よりは慣れたとはいえ、直火での火力調整はやっぱり難しい。遊牧生活を基本とするこちらの生活は、とつても過酷。日の入りと共に起き、一日の大半が厳しい自然の中での肉体労働。

日暮れに一度、集落の皆と夕食を食べているとは言っても、今日みたいに遠方に行った後は、こうして寝る前に夜食をとることも少なくないんだ。

特に朝が弱くて朝食を作れない私はせめてもと必ず夜食を用意しているけど、最初の頃は惨憺たる出来栄えだったっけ。

四苦八苦ししながら、それでも程なくして温まった夜食用のスープを出す。

すると木のお椀に口をつけて一口啜ったアーデルが、

「……随分上達したな」

とぼそりと呟いた。

「最近お疲れみただから、疲労回復に効くアンカを足してみたの」

ちよつと嬉しくなって、私も一口。

うん、焦げなし、生煮えなし、味付けマトモだ。

「ならば砕いたシュルカも組み合わせると、もっと良いな。両方とも疲労・倦怠感をとる生薬だが相乗効果が期待できる。ただし熱に弱いから、最後に上に散らすぐらいにしろ」

ふむふむと、教えてもらった香辛料の名前をメモに取る。

OL時代に使っていた、最初の数ページしか予定が埋まっていなかったスケジュール帳は、今では私の薬草ノートだ。

こちらでは紙は油紙以上に高価なもの。できる限り無駄がないよう、慎重に考えながら書き込んだ。「そこに書き込んだものは、そろそろ覚えられたのか？」

空になったお椀を渡され、もう一杯、お代わりを注ぐ。

目の前にいる男性は私の恩人であり、お医者様でもあるけれど、実は、もう一つ。私に異世界の薬学を教え込む、スパルタ教師の側面を持っている。

「大分覚えたつもりだけど、やっぱりまだ全部は無理だから、このノートは手放せないかな」

そう言っ、私はべらべらとページをめくる。

「しっかり暗記しろよ。お前は呑み込みは早いのに記憶力が弱いのが弱点だ」

その言葉に、私は溜息と共にぱたんとノートを閉じる。

そう簡単に言ってくれるな。馬と羊と生活している人間から見れば、スマホ・テレビ・パソコン



生活に慣れた私なんて、様々な分野で劣っていること極まりないわけで。

気力、体力、視力、聴力、記憶力。足りない箇所を上げれば、きりがない。

もはや気分はすっかりご老人。それに対してアーデルは、生まれながらの遊牧生活で鍛え上げられた、生粋の騎馬民族だ。

決して見た目だけではない、弓のようにしなやかで筋肉質な身体に、野性味を感じさせる精悍な顔立ち。褐色の耳には医師であることを示すイヤークラスがひとつ光る。

それがただの粗野な男に見えないのは、髪と同じ黒曜石の瞳が、少しの憂いと知性を宿して男の色気を添えているからかもしれない。

年こそ私よりもずっと若いけど、どこをどう見ても、年下だなんて思えない。こちらの世界の常識で言えば、本来なら子供がいてもおかしくない年齢の彼。

落ち着きも、思慮深さも、責任の重さも何もかもが違う。

生きていくだけで途方もない労力を強いらられるこの世界で。何故か今——私は生きている。

「今日は何をしていた？」

食事を終えたアーデルが問いかけてくる。

「今日はレイリに機織りを教わって失敗して。ナンナの手伝いで井戸に行ったけど水瓶を運べなくて……失敗して。スインが糸を染めるのを手伝……、眺めてた」

「相変わらず、女の仕事は難しいか」

指を折って失敗を数えていると、小さく溜息をつかれる。

「……ごめんさい」

アーデルは別に嫌味で言っているんじゃない。それは分かっている。彼も集落のみんなも優しく「異世界人だし病み上がりなんだから無理しないで」と笑ってくれるし、けれど食い扶持ぶちが一人増えるということは、狩りをするのも水を汲くむのも、全てが一人分追加が必要になるということだ。

特に今年はまぐさの伸びが悪かったそうで、一族が普段住んでいるエリエの街から離れたこの場所ところで、馬や家畜を放牧しているらしい。

ただ飯喰らいが、お荷物じゃないわけがないよね。

しかも体調はもう大分前に回復してたりするから、また問題で……

これでも元の世界では、運動部出身。体力には自信があったんだけどね。

それでも私は水瓶一つ肩に乗せて歩けないし、小さな子供ですら乗れる馬またがに跨またがることもできない。放牧に付き合えば方向が分からず、挙句の果てに迷子になる。

早い話。現代人な私は、たとえ体調が万全だったとしてもこの暮らしについていけないのだ。

それが分かっているから、いたたまれなさで、今日もただ謝るしかできなかった。

「しかし……細かい作業は得意だな。薬学も数学にも強い」

悄然しん然とした私に、思案しあん気な表情でアーデルが呟つぶやく。

「そりゃあ、これだけしつかり教えてもらえば、少しは手伝いだってできるようになるよ」

それに、私の実家、漢方薬局だったしね。

星の輝きも、風の匂いも、雨の音すら違うこの世界で、故郷を思い出せるものは、無骨なアーデルの手から生み出される薬の匂いだけ。

拾われた直後の寝たきりの時からずっとアーデルの手元を見ていたのは、作業を覚えようとしていたからじゃない。ただ単に、懐かしかったからだ。

「ねえ、今日の帰りが遅れたの、もしかしてまたラキーブさんに何か言われたから?」

ラキーブさんというのは、この集落の長であり、無駄なものを全て削ぎ落としたような、鋭い目をしたオジサマだ。

仕事で失敗ばかりしている私は彼に目を付けられているんだよね。

もしかしたらまた私のことで、何か注意を受けたのかもしれない。

こんなに遅くなるまで帰ってこなかったのも、いつもより煮え切らないアーデルの様子も、そう考えれば納得がいった。

「——酒が入ると長いからな、あの親父は」

軽く目を伏せたアーデルが、少し言いよどみながら頷うなずく。

うう。やっぱりかあ。もしかして、レイリの機織はたおりを手伝った時に、たくさんの糸を駄目にしてしまったことで注意を受けたんだらうか。それとも、染料の壺を倒してしまったこと?

仔ヤギを放す場所を間違えて、干し肉を作る作業の邪魔をしたのは昨日だっけ。

薪たきぎの束を倒して雪崩なだれを起こしてしまった件は、なんとか自分で元に戻したけど……

ああ、もう！ 思い当たることがありすぎて、頭を抱えるしかない。

そう苦悩する私を、アーディルが「リイナ」と、こちらの人独特のイントネーションで呼んだ。

「嫌味と捉えず聞いてほしい。リイナは、今も王宮に保護してもらおう気はないのか？ ……正直こ

この暮らしは、異世界人のお前には辛そうに見える」

お酒入りの金属のカップを水でも飲むかのように傾けながら、少し改まったアーディルに問われる。

けれど、いつだつて私の答えは一緒。

「王宮で保護してもらった人達の中で、元の世界に帰った人はいないんでしょう？ それなら、

『虹の雨』が降るまでここにいたいよ」

私が何でこの世界に来たのかは、分からない。いつ戻れるのかも分からない。

そんな私の深い絶望も、こちらの人からすれば、『珍しいけれども時折来る、不運な異世界人』

程度の認識だ。

別世界の知識を持った異世界人は王宮に行きさえすれば手厚く保護されて、こうやって日々の生

活に追われることもないと聞く。

それでも、私はどうしても元の世界に帰りたい。その唯一の希望が、この荒野にのみ降るとい

『虹の雨』だった。

「とはいえ、虹の雨に消えた異世界人の話は、伝承の上でだけだし、虹の雨だつて滅多に降るもの

じゃないぞ」

「でも、二つの世界が交わりし時、荒野に七色に輝く雨が降る。とも言われてるんでしょ」

「確かに古くから残る一節だが、砂漠に浮かぶ蜃気楼も、荒野に降る『虹の雨』も、どちらも神の領域。人が望んで得られる物ではない」

アーディルの冷静な指摘に、私は黙り込む。

見えるのに触ることができない蜃気楼のように、『虹の雨』もただの気象現象で、私を日本に帰す力なんて持っていないのかもしれない。もしそうだとしたら、私が今荒野に留まるために努力していることは全部無意味なこと。

それは分かっている。けれども伝承上の『虹の雨』と、私がこの世界に来た時に見た、光り輝く虹色の雨が、あまりにも酷似していて諦めがつかない。

私がおここに居続けるのは、みんなのためにならないと分かっている、元の世界に戻る最後の希望を前に、ここから動けないのだ。

「望み薄だつていうのは分かっている。でも私は虹色の雨に包まれてこの世界に来たの——。伝承はきつと無関係じゃない。どうしてもこの荒野から離れたくないよ」

「……」

「迷惑かけてると思うけど……、ほんとにゴメン」

膝を抱えて小さく謝る私に、溜息と共に謝るなど返された。

「ラキープの親父に、お前のことを言われたのは、確かだ」

両手で抱えていた薬草茶の水面が揺れるのを眺めていた私の横で、アーディルが棚に片付けた薬研けんに手を伸ばす。他にもいくつかの薬草を取り出して、薬として必要のない部分を取り除き始める。

いつもお酒が入っている時には、薬を作らないのに珍しいなと思っていると――
「……お前達は、夫婦になる気が本当にあるのかと問い詰められた」
「え？」

しばらく黙ったあと、唐突に話し出したアーデイルの言葉の意味が分からなくて、ぽかんとする。思わず精悍な顔を見つめると、あまり表情を出さない彼にしては珍しく、何と云うかばつが悪い顔つきをしている。

私は首を傾げながら問いかけた。

「だって、名目上は一応、結婚してるんでしょ？」 私達」

そう。私達は現在、偽装結婚の末、仮面夫婦として暮らしている。

独身女性である私がアーデイルと同じ幕屋に寝泊まりしているのは、私が寝たきりの頃ならともかく、こちらの常識ではありえない。

ただ元の世界とこちらでは、『結婚』の概念が大分違うんだ。

こちらでは、父親が娘の嫁ぎ先を決め、男女が同じ屋根の下で暮らして、女性が出産する。そうして初めて正式な『家族』とされるのが一般的なんだそう。

出産できなかった女性はどうするのだと、人権保護団体から盛大な抗議が来そうだけど、ここはもともと女性の権利がすごく低い、体力至上主義の遊牧生活。

そして女性側も、肉を狩り、時には狼の集団から女子供を守る男性を非常に尊敬してて、現状に不満を感じていないんだから、異世界人の私が口出しすることはないわな。

だから子どものいない夫婦は、結婚していても仮の夫婦扱いになる。

王宮や街に連れて行かれるのが嫌な私と、娘を売り込んでくる人達とのやりとりに疲れたアーデイルの利害が完全に一致。偽装結婚の契約を交わし、同じ幕屋で寝泊まりしている現在に至るのだ。もちろん、肉体関係もないけれど、それは周りには秘密にしていた、はず……？

私は黙ったままの、『夫』の顔を見上げる。

「アーデイル？」

重ねて問えば、諦めたような溜息ののち、とんでもない爆弾が落とされた。

「つまりだ。俺達の間で一度も夜の営みがないなら、婚姻関係を解消してリィナは王宮へ。俺は嫁をもらいなおせということだな」

「はあっ!? ちょ、ちょっとなんで、それ！」

思わず立ち上がって叫びかけた私の口を、慌てたアーデイルの大きな手が塞ぐ。

「静かにしろっ！」

むぐむぐっ！ ……んぐがっ！ ふっはー……っ！

ちよっと、アーデイル！ 殺す気!? こんな大きな手に口塞がれたら、息ができないよっ。

涙目になりながら、ぜいぜいと息を吐く私を、褐色の指でちよいちよいと手招きするアーデイル。何、内緒話をしないといけないわけ？ 時計すらないこの世界に、盗聴器なんてないでしょうに。

「どゆことっ？」

「王宮に行くのが嫌なら、エリエの街にある一族の館でお前の面倒を見ても良いと言ってきている。

別に持参金泥棒をするつもりはないぞ」

「んなことは、聞いてないよっ」

ひそひそと、でも思わず小声で叫ぶ。

ちなみに持参金と言うのは、女性が結婚する時に実家から持つて来るアレだ。

こちらの風習では、娘が生まれたらまず最初に考えるのが、持参金の積み立てについてというくらい、女性側の負担が大きくて、馬・ヤギ・絹地など様々な資産が動く。

私の場合は、トリップ時につけてたピアスの片方を売るだけで、ビックリするような値段になったので、自分で買った形になるんだけどね。

でも、アーデイルの属する一族はジャラフィード一族と言つて、古くからこの地に住まう騎馬民族。拠点であるエリエの街ではそこそこの有力者扱いだ。

だからもし一族の館でお世話になるなんてことになったら、大きな館から一步も出れない「フツウの女達の生活」が待っているわけで。それつて王宮に行くのと何が違うのさ。

「つまり、私達の関係が偽装結婚だつてはれてるわけ？」

「一度も営みの様子がないと、はつきり言い切られたからな。……様子を窺っていたんだろう」

あーりーえーなーいーっ！ 何それ。普通、夫婦生活を覗き見するかあ!?

思わず声を上げて、いきり立つ私に、アーデイルは、

「……っ！ めんどくさい！」

と言いつ捨てると、ぐいっと腕を引つ張つた。その勢いで、私は床に座つた彼の膝上に横乗りになる。

「静かに話せないなら責任持たんど。お前が思っているより、皆ずつと耳が良いんだ」

右の耳朶をくすぐるくらい近くにあるアーデイルの顔に、思わず無言でこくこくと頷いた。

「ええとつまり、ラキーブさんは覗き見をしていたわけじゃなく、逆にこつちの人からすると、夜の生活は漏れ聞こえて当然なわけ？」

声を潜めているとはいえ、怒りと羞恥は収まらない。

最大限の(?) 小さな声で、猛烈に抗議をすれば、アーデイルは平然と返してきた。

「ああ。別に聞き耳を立てているわけじゃないが、聞こえても不思議じゃないのも確かだな。――

今まで特に気にしたこともないが」

うわあ。最悪。デリカシーとか、プライバシーつて単語はないのかい？

「つまり、今俺達がしている会話を聞かれたら、あとは何をどう取り繕つても言い訳にしかならない。偽装結婚がばれるのは、俺だつて本意じゃないんだ」

間近できりと睨まれて、不覚にもどきりとする。

馬に乗せてもらった時以外で、こんなに近くで話したことなんてない。

膝の上に抱えられて初めて、アーデイルの力強さとか、腰に回された手の大きさを強く感じて、軽く動揺が走る。

「わかった。絶対、静かに話す。約束する！」

動揺もあらわに小声で宣言すれば、で、どうする? と問いかけられる。

「お前……。その、どのくらい演技力あるんだ? 」

「それは何？ ……もしかして、私にA V女優のような声を上げろって言うわけ？」

あー！ むりむりむりっ！ 小学校の学芸会では、木の役とか花の役が関の山だった私だ。

「えーぶいの意味は分かんが、言いたいことは何となく分かる」

「それに、私だってこの生活長いけど、一度もみんなのそんな雰囲気になんかつかないよ？」

近くの幕屋には他の若い夫婦もいるのにだ。

「お前はいつも疲れて熟睡してるからな。後は異世界人であるお前の動向がそれだけ注目されてるってことだろう」

そう溜息と共に言われても、これっぽっちも嬉しくないよ。

「ここ最近は何に夜間に天窓を開けていたのも一因だろうな。営みの声が聞こえないのを不審に思われたんだろう」

そういえばまだ体調が思わしくなかった時は、屋根は全部厚いフェルトで覆われていて、外気と音を遮断してくれていたっけ。

寒暖の差が病み上がりの身体に良くないって言ったアーデイルに、体調も回復したし時間の経過がわからないからって私が開け始めて……

——あ。もしかして今回の原因、私……？

今からでも閉めようかと、わたわたと天井を指差して伝える私に、何故かアーデイルはゆるく首を振り、明後日の方向を向きながらぼそりと呟く。

「……それに、声だけじゃないと思うぞ。判断材料は」

あ……？ それはつまり、何ですか。

キスマークの一つでもつけるということですか？

喧嘩上等の長ランでも着込みたい気分ですって、私に、殊更ひそめられたアーデイルの囁きが、耳をくすぐる。

「なあ。ついでに聞くが……。お前、男性経験はあるのか？」

お互いいつもだったら、絶対しそうな会話。

これに私の未来がかかっているというんだから、世も末だ。

アーデイルが話す度に密着した身体で受ける振動を意識の隅に追いやり、無理矢理おどけて答える。

「だって私、二十四歳だよ？」

「……お前それ、外では絶対隠しておけよ。みんなに十五、六程度としか思われてないから、同年代の俺との結婚が許されたんだからな」

うぐぐぐ。わかってますってば！

アーデイルもそんな嫌そうな顔しないでよ。年増で悪かったわね！

ああ。素面じゃ到底話し続けられそうにない。

「アーデイル、私も飲みたい。素面じゃキツイ」

「お前、酒まで飲めるのか」

呆れたような声に、ちよつと意地悪な気持ちになって、問い返す。

「アーデイルこそ、女性経験あるの？」

遊牧民らしい鍛え上げられた男の身体に、知的で切れ長の瞳。すつと通った鼻筋と形の良い唇。女にガツガツしていないところと、少し物憂げな雰囲気は、元の世界でもさぞかしモテるだろう。どこの世界も医者が高給取りだしね。

けど、こちらの世界では、結婚前の男女が婚前交渉を結ぶのは難しい。

実は女性経験ないだろうと踏んでるんだけど――？

あ。でも、まさか。

「もしかして、医者 of 勉強で王都に行った時に、美女と遊んだりしたことがあるわけ？」

王都になら娼館もあるだろうし、遊牧生活よりは女性達の生活自由度も高そうだ。

『夜の生活をみんなに監視されていた』という、あまりに居たたまれない状況に動揺して、まだお酒も飲んでないのに、いつもなら絶対言わないようなセリフが口をついて出る。

アーディルはそんな私をちらりと一瞥すると、重い溜息をひとつ。諦めたように顔を歪めて、銀色のコップに満たしたお酒を、私の手の中に落としてくれる。

おっとつと。危ないじゃない。

「――俺は別に、今まで異性経験がないとは言っていない」

喜び勇んで乳白色のお酒に口をつけた私は、その発言に思いつきりむせ返る。

「あ……。そうなんだ」

動揺したことに自分で動揺して、右へ左へと目が泳ぎそうになるのを必死に食い止める。

そんな様子を間近にいるアーディルに見られたくなくて、思わずくつと一気にコップを傾けた。

「おい、お前。そんなに一気に」

慌てた声。一気に身体の中を巡った強いアルコールに一瞬くらりとして、アーディルに寄りかかる。

「結構強い。これ」

ぺろりと唇についたお酒をなめると、軽く頬をつねられた。い、痛い。

「当たり前だ。そんな無茶な飲み方して、二日酔いになっても薬は出さんぞ」

「けち」

小さく文句を言うと、今度はゆっくり、残ったお酒に口をつける。

「でも、本当……どうしようね」

背中をもたせかけたまま、独り言のように呟いた言葉に、アーディルからの返事はない。

ただ、器用にも片手で生薬を作っていたアーディルが、薬包紙の上に無言でそれを広げる。

ざらりとした大きな手が細やかな作業を続けるのを、私はぼんやりと見ていた。

「それ、何作ってるの？」

「これか？ 家庭平和の薬……になるのか」

「かていへいわの薬？」

意味が分からなくて問い返せば、さらりと「淫薬だな」と返される。

「つまり、夜のお薬？」

何故、今このタイミングで作っているのだ。嫌な予感に、思わず背中を冷たいものが走る。

「え、何それ。まさか今から作るから、それを飲めとか言わないよね」

慌てて身体を起こして、慎重に問いかける。

「これは男用だからな。お前がそのまま飲んでも意味がない。……それとも、俺が飲んでみるか？」
いつもあまり感情を表に出さないアーデルが、少し声を低めてそう言った。

「いいいいい、いいえ！ 結構です！」

ぶんぶんと小声ながらも全力で拒否すれば、喉の奥で、くくつと笑われる。

「冗談だ」

おのれ。からかったな。

いつもはこんな冗談絶対言わないのに！

睨み付ける私に苦笑して、アーデルは更なる問題発言をさらりと返す。

「大体お前、月のものが終わったばかりだろう？ そんな危険な状態の女なんて、子どもを産ませる気じゃなきゃ押し倒せるか」

う、わあああ〜！

酒の力も手伝って、かああつと耳まで赤くなる。恥ずかしさで、心臓はばくばく言いつばなしだ。

「何で私の身体のリズム、わかってるのよっ」

「医者が患者の様子を診みておかないで、どうするんだ」

思わず恨みを込めて、どすの利いた小さい声で詰問すれば、少し眉を寄せて平然と返すアーデル。
相変わらず、ほんつつつきで、女性にプライベートの無い世界だなあつ！

女のリズムを知ることこそつちが慣れていても、こつちが大丈夫じゃないんだい。

赤くなったり青くなったり、思わず手で顔をパタパタ扇いでいると、アーデルがふいに顔を上げ、真顔で聞いてきた。

「お前、淫薬いんやくの調合と作用の仕方。——知っているか？」

「知らない。そんなお薬、一生お世話になる気はないし」

きっぱり答える私はさすがにジト目だ。

「そうじゃない。今後も元の世界に戻る方法を探すなら、ある程度自活できる能力をつけておいた方がよい。特にお前は身体が弱い。俺が守ってやれるうちに、きちんとした薬学を身につける」

さつきとは違った、真面目で真剣な顔。

「いつまでこの状態でいられるか……、俺にだって分からないんだ」

その溜息は、先ほどのラキーブさんとの話し合いを思い出したからだろう。

確かにアーデルは成人男性で、ジャラフイード一族の中でも一目置かれていた存在。

とはいえ、年長者の決定に勝手に逆らえるわけではない。最悪、族長が強硬決定してしまえば、私は王都に行くしかなくて。

そう——。いつだってアーデルは、私の行く末を心配してくれる。

そう思えば少し神秘的な気持ちになって、彼の膝の上でこくりと小さく頷うなづいた。するとアーデルが再び口を開く。

「こちらの世界で、子どもができる、できないは重要だ。だから淫薬いんやくは高値で売買されるし、覚えておいて損はない」

ふむふむ。突然始まった座学に、ノートを手元に寄せる。
 「今俺が作っていたのが、もっとも流通数の多い淫薬だな。持ち運びしやすく、日持ちがして副作用も見られない」

「材料を揃えるのや製法は難しい？」

「材料には少し特殊なものもあるが、製法自体は難しくもないな。それも、男性用の作り方さえ覚えれば、大丈夫だ」

そうなのか。腹筋が六つに割れているのが標準の、体力魔人の男性達に淫薬が必要だなんて、これっぽっちも感じないけどなあ……

どこの世界も、子作りに関する悩みは同じってことかしら。

試しに聞いてみれば、血行を落ち着かせることで強すぎる性欲や興奮から来る怒りを抑制するような、淫薬とは真逆の作用を持つ抑制薬もあるんだとか。

それがあつたら、猪突猛進の私の性格も治るかなあ。再び聞けば、馬鹿なことを考えるなど一両断、呆れられた。

比較的安価な淫薬と違い、抑制薬の原材料であるベルゼの枝は、なんと王侯貴族しか使わない金貨で取引されるんだって。それじゃ短気が治る前に、破産だ。破産。

そんな軽口を叩きながらも、必死にペンを走らせる。

「今日の前で作ってたのでいいなら、多分私作れるよ。調合手順覚えてし」

「頼もしいな」

「でも、女性用のはどうするの？」

お酒のせいでぼうっとしてきた頭を、軽く左右に振って聞く。

アーデルは私に説明しながら片手で道具をしまい、薬包紙に包んだばかりの薬を、薬箱の中身の入っていない小さな引き出しの中に入れる。

「ああ。スミルの葉を濃い目に混ぜた軟膏に練り込むといいな。一般的には塗布が一番効き目があると考えられているし、液体よりも保存が利くから売りやすい。……ただ、男性用の淫薬を作れば、客が自分で女性用に転用するから、売れるのはもっぱら男性用だ」

「そうなの？」

「自分でスミルの軟膏を作るのは難しいが、男性用の淫薬をスミル酒に混ぜれば女性に向けた使用にも問題はない。混ぜたらすぐに飲ませることにさえ注意すれば、それでも代用できる」

「そうなのか。」

「軟膏の作り方は言えるか？」

もちろん。スミルの葉入りの軟膏なら、何度も作った。

説明しようとして、自分の息が上がっていることに気がつく。

軽く暴れたし、久々のアルコールで、回りが早かったのかもしれない……

チェイサー（水）なしで、一気におおったしね。

仕方なく、頷くことで覚えていると意思表示する。

ちなみにスミル酒も、スミルの葉を使って作られる、緑がかった乳白色のお酒。ブランデーみた

いに度数が結構強くて、少しクセがある。そう、今まさに私が飲んだような……

「——アーディル？」

何故だか嫌な予感がして、ぞくりと背中が震える。

この鳴り止まない鼓動は、本当にアルコールのせい……だよな？

ますます霞がかかるようにぼうつとしていく頭で、必死に考える。

鼓動の速さが、まるで危険を知らせるアラートのようだ。

「ね。今、作った薬。その引き出しにしまったよね」

腰に回されたアーディルの手を、私の肩に触れているアーディルの胸板を、何故私はこんなに意識してしまうの……

「……そうだな」

ぶるりと頭を振って意識を保とうとしても、触れ合うほど近くにいるアーディルの声が、何だかふわふわと遠くに聞こえる。

「アーディル、いつも、薬は絶対に切らさないように、してた、よね」

息が、上手くできない。

そういえば——

「私、帰ってくる前。薬箱、チェックして、たよ？」

「ああ……」

息が、耳朶にかかると。

「……ッ」

それが、どうしてこんなにも、つらい。

息が上がって耐え切れず、ぐったりとアーディルに身体を預ければ、その衝撃で硬い生地に擦れた肌が悲鳴を上げた。

——まさか。まさか。まさか。

じわりと汗の浮いた腕を、自分自身で抱きしめる。

たった今作った淫薬を入れるまで空になっていた引き出し。飲んだばかりのスマイル酒。

ぐるぐると回る世界に、もう自分が何を言っているかも分からない。一際大きく世界が回って、アーディルの整った顔とその向こうに幕屋の色鮮やかな天井が見える。

「……酒と薬のせいにしてしまえ」

背中に当たる硬い床の感触と、しゅるりと解かれた首もとの布。

最後までする気はないから安心しろ——

その一言と共に、私の上げた小さな悲鳴は彼の唇に吸い取られた。

周りの人間に声を聞かれているかもしれない。

そんな状況下で行為を楽しめるほど、セックスの経験なんて積んでいない。

そして、薬のせいで与えられる強い快樂にただ身をゆだねられるほど、全ての理性が飛んでいるわけでもなかった。

結果。薬がもたらす、これ以上ないほどの快楽と、強い羞恥と困惑と。

そして声を出してはいけないという自制心がせめぎあい、ますます私の身体を高ぶらせる。良すぎて苦しい。そんな快感があるだなんて、今まで考えたこともなかった。

「……………あ！」

鎖骨の窪みから首筋にかけてを、キスで濡れたアーデルの唇が撫で上げる。

ただそれだけの行為が、悲鳴を上げてしまいうまくない強い刺激に感じて、思わず身をよじる。「……………っ！」

小刻みに震える儘ならない身体と、灼熱のような熱い吐息。

下から上へ、外から内へ。素肌を這う感覚から逃げようとしても、かえって大きくはだけた服の合わせから、胸元が剥き出しになって事態は悪くなるばかり。

日に焼けた大きな掌と、その無骨な指の隙間からのぞく白い肌。触られてもいない胸の頂が、自己主張するように赤く色づいているのがよく見える。

「ほんと——、まって……………っ！」

視覚的な淫靡さと強い羞恥心は混乱に拍車をかけ、私は荒く息を乱しながらも、なんとかアーデルの厚い胸板を押し返す。すると、その拍子。硬くなった桃色の先端が、アーデルの硬い毛織物の服に擦れて、甘く痺れるような感覚が走った。

「ひうつ、……………んッ！」

何、これ……………

思わず漏れ出した声に愕然として、慌てて掌を口に押し当て意識を保つ。

なのに、そんな私の抵抗を嘲笑うかのように、彼の手は柔らかく形を変える膨らみを、ぐにぐにと弄び始める。

強引なのに優しく、性急なのに緩やかで。

時に右の、時に左の蕾を爪弾き、胸の中に押し込むように愛撫する。

まるで甘いお菓子を食べるみたいに首筋を馴染められれば、濡れた音が一層いやらしい。

お願いだから、もう止めて。

そう拒絶しようとしても、口から漏れ出るのは掠れた吐息が精一杯だ。

「は——、んん……………っ！」

目尻に溜まった涙を優しく吸っていたアーデルの唇が、そのままくちゆりと耳朶を食む。元々弱い耳元への刺激に、腰の奥からぞくぞくとした感覚が突き上げる。一生懸命、唇を噛み締めてこらえようとしても、次々と与えられる刺激になす術がない。

それでも何とか抵抗の言葉を紡ごうとした瞬間。まるで狙っていたかのように、恥ずかしいほど硬くなった胸の尖りを、きゅっ、と突然摘まれた。

「ん、ああっ！」

その鋭い刺激に耐え切れずに出た声は、何とか押し殺していた今までのものと違って、自分でもはっきりと分かるほど艶めいていて。

もう、本気でやばい、よ……っ！

「お……ねがい。っ……アーデル」

焼けつくような快樂の合間。辛うじて残った理性と意識を必死でかき集めて、あえぐように言う。息も絶え絶えに訴えても、涙で濁った視界では、アーデルがどんな顔をしているか分からない。でも、このまま進んで良いはずがないよ——

「……も、だめ、だっ……って」

食い込む爪が、ほんの一瞬、霧散しそうな意識をかるうじて留まらせる。けれど。

「ね……っ？」

「……ッ！」

同意のための一言に返されたのは、小さな舌打ちと聞いたことのない余裕のない声で。

「最後まで冷静でいてほしいなら、お前も協力しろ……っ」

「ひゃうっ！」

突然彼の口に含まれた胸の頂に、喉の奥から甲高い悲鳴が漏れる。

硬くなった胸の先端を、アーデルは鉛でも舐めるように軽く転がし、時に力強く舌先で弾いて、時に押しつぶすように舐め上げる。

「やああっ、あんん！」

緩急つけながらの胸元の愛撫に、触られてもいない下腹部が重い疼きを生む。

それに流されまいと、抵抗するように口元の拳を握り締めたけれど、あられもない声を上げ続けるだけしかできない。

「や、やう。くっ、んん！」

身体がとろけ落ちて行きそうな快樂に、最後の理性で必死に拳を噛む。

がりりとした痛みが、最後の命綱。それなのに——

「え——？」

呼吸を整える間もなく、うつぶせに身体を返されると、しゅるりという衣擦れの音と共に、視界が塞がれた。

「ふあ……っ？」

何が起きたか分からず、空転する思考。火照ったうなじに落とされた熱い唇の感覚。

剥き出しになった背中に感じる夜気の冷たさでさえも快感にしかならないのに、突如。いきなり電流が走ったのかと錯覚するほど、強すぎる甘い刺激が身体を駆け抜ける。

「ひゃんっ！」

思考が鈍り、視界も塞がれた状態では、それが敷物に胸の先端を擦り付けられたせいで気づける余裕もない。ただその一際高い嬌声に、アーデルは何を思ったのか。

うつぶせにした背中を手を添えて、わざと私の身体を敷物に押し付けるように揺すり始めた。

「やあっ、あっ、っ！……っ、う、——んっ！」

何度も優しく毛織物の敷物に擦り付けられて、じくじくとした痛みと快感に、もう荒地の夜の冷

たさなんて感じ取れない。

視界が塞がれば、その他の感覚は否応なく増していく。

うつ伏せにされた身体が、いつの間にか腰だけ高く上げられても、そしてそんな卑猥な体勢になっただけに気づいても、何もできない。

ただ火の塊のようなこの身体を、どうして良いか分からなくて。

「アー、ディ……ル——っ」

まるでそれが救いの呪文であるかのように、幾度も彼の名を呼ぶ。

——これ以上っ。これ以上刺激され続けたら、何か余計なことを口走ってしまいたいよ……先悦びを知っている身体がこれだけじゃ足りないよ、もっともっとと貪欲に、熱く滴るような切なさを強請る。

振り払っても湧き上がる淫らな思考を、唇を噛み締め止めるけれど、理性は焼き切れる寸前で。

けれど私の願いは反対に。太股を撫で上げていた彼の掌は容赦なく、焦らすようにゆっくと内腿から臀部へと回った。

「ふあ……っ！」

柔らかな双丘を、指先で直接撫でられる感触。その先を予感した身体が、びくびくと震える。

肉体労働とは無縁の白く柔らかい肌を楽しむように、強く、優しく——遊ぶように撫で上げ続けられれば、まだ触られてもいない秘所が、待ち望むようにずくと強く疼いてしまう。

「リイナ……」

無愛想とも言えるくらい無口なアーデイルの、私を呼ぶ掠れた声。

自分の中で必死に抵抗していた何かが、その色香を含んだ声にふと緩む。すると、それを見計らっていたように、彼の長い指が蜜をたたえた秘所に、ゆっくと潜り込んだ。

「ひあ、ああんッ！」

耳に響く、蜜が溢れるくちやりとした淫らな音と、身体を駆け抜けるびりびりとした甘い快感。

ただ指を入れられただけとは考えられないくらいの、強い衝撃が襲う。

まるで口を閉じることを許さないと言うように、アーデイルの指先が歯列を割り、私の舌先まで弄ぶ。ざらりとした指先の感触も、飲み下せない唾液が顎を伝う感覚すら、悦楽に変じていく。

「ふ、う……っつ、やあ。んんっ」

「声を殺すな。声を我慢——するな」

腰の窪みから背筋に沿って落とされた唇に、声に、身体がぶるりと震える。

薬の！ 薬のせい——っ！

「……薬の、せいだ」

私の心を読んだかのような、腰に響く低いアーデイルの声と、体内に潜り込んだ長い指先。

それがゆっくと、最奥を引っかくように深く曲げられる。

それだけで。たったそれだけの仕草なのに。

「はあっ、あ——ッ!!」

男の指を待ち望んでいた身体は、呆気なく達してしまった。

——葉のせいだ……

こんなに呆気なく、しかも内で達したことなんて今までない。荒い呼吸の合間。霞がかかった、ぼんやりした思考でそう思う。

絶頂の余韻と、葉のせいでも更なる強い刺激を求めている、ままならない身体と。それでもこれで終わったのだと——ぐったりと力を抜く。

なのに、そこを狙ったように、二本に増やされた指がぐぷりと一気に蜜壺に沈み込む。そうして内を押し広げるように、卑猥な音を立てながら、ばらばらに内壁をかき混ぜ始めた。

「え、あ、やっあッ、あん！」

こんなに性急に幾度も追い詰められたら、意識が、身体が、追いつかない。

なのに、いったばかりの秘所は、さらなる愉樂を求めて彼の指を喜び勇んで受け入れる。

「っ、ああ……っ！ まっ……てッ。んんっ！」

いつの間にか視界を塞ぐ布もなく。ただ彼の動き一つに、あられもない声を上げ続けることしかできない。

何で。どうして、こうなったの……っ！！

気持ちも思考も置いてけぼりなのに、貪欲な身体が快感を集めようと彼の指を自然と締め付け、より一層濡れた音が部屋に響く。

弱い所を攻められて、腰がびくびく跳ねるのを止められない。どうして良いかわからなくて、無意識に彼の名を呼びながら脚を絡めて、幼子のように首を振り続ける。

耳朶を掠る、不機嫌そうな唸り声と、小さな舌打ちの音。

後ろから抱えられるような体勢だったのに、がくがくと震える片足を唐突に取られて、アーディルの肩に乗せられる。

「まっ……て！ アーディ……。やっ、んんんっ！」

中に入れられた指が、ぐるりと内壁を擦り上げると同時に、涙で濁った視界が反転して、目尻に涙が流れる。

そうして大きく開いた足を折り曲げるように抱えられれば、もはや視界にすら逃げ場がなくて。

「っ………！」

軽々足を押さえ込む腕も、ツンと自己主張している胸の頂も、蜜に溢れる花芯に埋め込まれた長い指先も。二人の肌色のコントラストすら、全てが恥ずかしくて死にそうになる。

快感も羞恥も、過ぎれば拷問にすら近い毒だよ——！！

もうどうして良いのかわからない。けれど潤んだ瞳で弱く首を振れば、さつきまで伏せていたアーディルの黒い瞳と目が合った。

「アーディ……ル——」

お願いだから勘弁して……そう言おうとして、逡巡しながら彼の名を呼ぶ。

でもどうしても、こんな近くで快樂に染まった顔を見られることに耐えられなくて——

結局。真っ赤に染まった顔を自分の肩にうずめるように顔を背け、ギョツと目をつぶって無理やり視線を外した。

「リイナ。お前——」

微かに耳朶を打つ、こくりと喉が鳴る小さな音。しばらくの沈黙と、苛だたしげな溜息。

「……分かってないな」

その瞳に情欲が灯っているかも知れないまま、それでもその声に、少しだけ呆れたような色が乗っていたのが記憶に残る。

名前を呼ばれるのは好きだ。葉草の匂いが染み付いたアーデルの匂いも。

でも——っ。

「リイナ」

再び名を呼ばれ、背けた顔の顎先を捕らえられれば、彼のまなざしは今や触れ合うほどに近い。

その姿勢のまま、深く合わせられた口付けに、もう何も考えられなくなる。

くたりと力の抜けた舌先を絡め取られ、何度も擦り合わせながら、歯列をなぞるように舐められて、喉の奥から吐息が漏れる。口腔を濡る湿った音と、焼け付くような吐息が甘く響く。

「はあっ……ふっ」

そうして、ようやくと離れた二人の間にかかる小さな銀の橋。

キスの合間にいつしか再開された、ゆつくりとしたアーデルの指の動きも、私の声に合わせるように次第に激しさを増していく。部屋中に響くほどの濡れた音が、くちゅくちゅと淫猥に響き渡り続けた。

「ああっ、あッ、もお、お願っ……！ とめ、てえ——っ！ ああっんっ!!」

「良い声だ——。聞かせてやるのが、少し……惜しいな」

硬くなった胸の先端を口に含まれ、時折、気ままに花芯を強く弾かれれば、理性も思考も最早欠片も残らない。甘い痙攣を抑え切れなくなり、無意識にアーデルの背に回した腕が、服越しに薄らと彼の汗を感じ取って……それが何故だか嬉しくて。

彼が何を言っているかも知れないまま、チカチカと視界が点滅し、意識が遠のき始める。

「ほら。——もう一度」

「きやうっ、——ッ！ ああっ、やっ、んんっ……!!」

いきなり速められた動きに、さらに悦楽が深くなり、高まりと共に光の渦が押し寄せる。

高く抱え上げられたままのつま先がきゅっ強く丸まり、ふるふると震え出せばもう……っ！

「あっあ、あああ——っ!!」

迫り来る絶頂の予感に、胎内がきゅうっつと彼を締め付ける。

最後、唐突に増やされた三本の指が、一気に最奥の弱い所を押し上げて、ついに私の意識は光の彼方へと飛んだ。

そうしてその後も、夜が白み始めるまで何度か攻め立てられて、幾度も気を失った。

結局、彼の繊細で力強い指先と唇は、余す所なく私の身体を知ったけれど、約束通り私が『彼』を知ることにはなかった。

程なくして、私達は周りに正式に『夫婦』であると認められた。

胸元に散る無数の赤い花と、数日間使い物にならなかった足腰と、何よりもあの声によって。「二人が夫婦になってないの、皆気がついてたよ？ 大体ね、こ〜んな華奢なりイナが、アーデルを受け入れた翌日に歩けるわけないって！」

「一番仲のいいレイリに、「当然よ」と艶やかに微笑まれて、私は異世界の常識に撃沈する。こうして偽装夫婦であり、定期的な偽の営みすらある私達の——後戻りできない、不器用な関係が、始まってしまった。

第2章 葉草採取

「リイナ。見つけたよ〜、これでしょ？」

「でしょ〜？」

「ずるいよ、レイリ！ あたし達がリイナに見つけてあげたかったのにー！」

「ぜいぜいと荒い息の合間に、頭上の岩山から数々の声が降ってくる。

「右足、こっち！ 左手は、その木を持って！」

「その木って、どこの木!？」

アドバイス通りに、へろへろの腕を伸ばしても、草ばっかりで届く木なんてありやしない。足元の小石で滑りつつも、ちよつと開けた岩棚の上に、何とか腰を下ろす。

「ほんつとごめん。もう無理だ〜」

するとその声に誘われるように、岩山の上からびよこびよこ様々な年齢の少女達が顔を出した。

「リイナ。大丈夫ー？」

「ここが一番、登りやすいのに『ね〜〜』」

一部の声が重なって聞こえるのは、疲れによる幻聴——ではなくて、双子のマトルとラタルの声。人の語尾を真似るのが大好きなお年頃の、可愛い幼少組だ。

その横で、長い髪が美しいスインが、はらはらしたような顔で此方を覗き込んでいる。

『自分達ができることは、年長者も皆できるはず！』

そう無邪気に思っている双子と違って、私が如何に何もできないかを知っているスインは、これ以上登ってこないようにと必死に声を掛けてくれるけど——、大丈夫！

登れって言われても、もう無理！

汗を拭った首筋に、そよりと吹きつける風が気持ちよくて、胸元のボタンも外す。

あー。気持ちいい。

「……で、どう？ 上にはたくさん生えてる？」

その姿のまま声をかけると、それを見ていたスインが、ちよつと恥ずかしそうに頷いた。

今私達がいるのは、集落から程近くにある岩山。

ひよいひよいと無造作に小石を置いたように、いくつもの岩山が並んでいる中で、私が果敢に登っているのは四階建てくらいの高さの小さな山だ。

見た目、そんなに酷い絶壁でもない。

ジャングルジムでも登る要領でチビっ子達が駆け上がったのを見て、私も途中まで着いて来たんだけど……山頂へのルートを仰ぎ見て、早々に諦めた。

これ以上は駄目だ。無理しない方がいい。

自分で採取に行ったら、帰りは最悪、私が怪我人という名のお荷物になってしまっただろう。

「ここしばらくは雨が続いてたし、珍しい薬草があったらラッキーだと思っただけだなあ……」
涼しい風に吹かれながら、思わず独りごちる。

在庫が少ない薬草が、この岩山の上に群生していると聞いたから、折角のチャンスだったのに。

どうやら今回は……、いや、今回も。自分で見に行くのは諦めた方が良いみたい。

毎度のことながら、ちよつとへこむ。

エリエの街にいる時はほとんど館から出ない女達も、一旦、遊牧に出れば幕屋の中に籠りっぱなしというわけにはいかない。

水場での洗濯はもちろんのこと、水を汲んだり、木の実を採りに行ったり。時にはヒツジやヤギみたいな小さい動物の放牧までも担当する。

だから遊牧に同行できる女達は、ジャラフィード一族の中でも優秀な人ばかりなんだよね。

幼少組の子達ですら、自分達だけで朝の水汲みや家畜の乳搾り、羊毛を洗ったりする紡績のお手伝いができるのよ。

そんなお手伝いもろくにできない私は、ずっと幕屋の中で薬草と格闘しているんだけど、毎日だ

とさすがに飽きる。ていうか、煮詰まる。

スケジュール帳のほとんどのページが、もう生葉のことでいっぱいだし、そろそろ現物と見比べないと、違いが分からなくなってきたものも多い。

だから最近は、なるべくレイリ達に付き合って自生している状態の薬草や樹皮・塊根を自分で採取するように心がけていたんだけど……

ちびっ子達でも行ける場所にすら行けないんだもんなあ。さすがにへこむよね……

溜息をついてから、ふと顔を上げて周りを見渡した。すると視界に入ってきた景色に目を見張る。それは、ずっと平地にいた私が見ていた景色とは違う、色鮮やかな世界で。

濃淡のついた緑の草原と、遠くに見える赤茶の荒野。

揺れる草木はきらきらと波打ち、水を湛えた湖は、地上に落ちた月のよう。

岩山の傍には、しなやかな四足の黒い影が小さな群れを作り、孤を描く大地をどこまでも澄み切った美しい青空が優しく包む。

神の箱庭のような美しい景色に、一瞬落ち込みかけた気分が、あっさりと浮上する。

「すごい……」

雄大な景色を見るために登ってきた。今日はそれで良いじゃないか。うん、そう思う。

うじうじ悩んでいても、仕方ない！

そう勝手に自己満足に浸っていると、小鹿のようにしなやかな身体つきのレイリが、薬草を背負った状態で軽々と、私のもとまで下りてきた。

「ほら、だから無理せず下で待ってて言ったのよ」
 「ごめん。でもさ。ほら、マタルもラタルも登れてたし、最近、筋肉ついてきたから私も登れるかもって思っちゃったんだよ」

「も〜。頑張るのは良いことだけど、怪我でもされたら、私アーデイルに殺されちゃうわ。『薬師』は本来男の仕事なんだから、無理しないでよ?」

そう言っつて、レイリは採取した草木を私の目の前に広げてくれる。

赤い実、とがった枝、棘のついた小さな花。こっちの木の実は何だろう。

「どう? リイナ。使えそうなの、ある?」

「うん、ドリスの実の在庫が少なくなつてたから助かる。それからカムの枝も。それから——」
 私にできる仕事は多くない。

女の仕事の中でも、力の要らない作業を重点的に、何度もなんつども、練習した。けれど、比較的簡単だと言われた機織りの仕事ですら全うできなかったのは、記憶に新しい。

横糸はこんがらがり、縦糸は何故か切れたし、糸を紡げばでき上がったのは通常の三倍の太さ。最後は酷い肩こりによる頭痛勃発。その後半日寝込んで、いろんな意味で最悪だった。

でも……情けないとはわかつてはいるけど、こうして目的の植物を摘んできてもらった後は私の出番。「こっちの果皮はまだ少し青いかな。生薬にするにはあと二日くらい待たないと成分が薄いかも。それからこの樹皮は白い方が使える。茶色はもう傷んで駄目。あと……」

二人に簡単に説明しながら、生薬になるものとならないものを、慎重に地面に分別していく。

集落の女性が一家の母となった時に扱う『薬』は香辛料までだから、料理として口にしない生薬は、彼女達は全くもって分からない。

異世界人だからということで大目に見てもらつても、やはり『妻』となれば、それなりに立場や役割がある。

アーデイルや周りの皆が優しくしても、街の人間から「ただの役立たずの嫁なんて王宮へ連れて行け!」と言われる危険性は今後も付いて回るんだよね。

だから必死にアーデイルの手伝いをして、ようやくと今、街の人間にも何とか『見習い薬師』と認めてもらえる程度にはなつてきた。

こちらの世界に、女性の薬師は本来いないけど、アーデイルがいない時に、風邪薬なんかをすぐ調べられるようになれば、私もただのお荷物ではなくなる。

男の人には話しくなくて、症状を悪化させやすい婦人科の薬は、特に意識して覚えたりとかね。——ここに残るために、やれることは全部やっておかないと。

男女の仕事が明確に分けられているこの国で、本当の薬師になれるかは分からない。でも。

橋田梨奈。二十四歳、元OL。

異世界で偽装結婚して、現在、薬師の猛勉強中です。
